



第 34 回

朱鷺のように、夢の翼を大きく広げよう。

令和元（2019）年 1 2 月

今回（第 17 回）の「夢アイデア」の応募作品で、私が最も嬉しかったのは、次世代を担う子供たち、高校生など若者の夢・アイデア提案の競演になったことです。

「夢見る」ことは、子供たち、若者の特権ともいえます。夢を育む、のは大人、社会の責任です。この夢アイデア事業の目的は「夢を育む」ことにあります。「本気で、夢を考える」企画なのです。

夢見る子供たち

何といっても、鹿児島の子供たちの 8 編の夢とアイデア、提案です。ある学習グループの一人一人が自分の街、地域の活性化を願って、夢を膨らませた作品でした。その一つ「過疎化の村を映画で P R 大作戦」が最優秀賞に輝きましたが、その他のいずれの提案も原稿用紙に、一字一字彫り込むように、街づくりの夢アイデアが丁寧に書かれ、イラスト付きで、それぞれに、子供たちの街への思いが込められていました。

大隅半島の佐多岬周辺の美しい海、自然など地域の宝をプロモーション映画にして都市住民を呼び、地域を活性化する夢とアイデア。素晴らしい景観を生かした錦江湾岸沿い「自転車ツアー」。鹿児島ラーメンや黒豚など食も。みんなの触れ合いの場づくり「夢の公園」。厄介者の火山灰で「泥団子」を作り、帰りに「せごどん」（西郷隆盛）が愛した温泉にはいってもらおう。また火山灰の焼き物づくりとショップや「いもスタンプづくり」など、どれもほほえましく、街に元気をもらった夢でした。

心理学者ユングは子供の夢は「神から贈られた夢」と言っています。大切に大切に、育てたいものです。

人々を繋ぐ場づくり

災害のたびに放映される体育館などでの「避難生活」。床にうずくまって耐える被災者に「何とかできないものか」と誰しもが思います。提案「迷わず駆け込みたくなる避難場所が欲しい」。日頃から地域の絆を「つなぐ場」として、住民も活用できる新しい形の小学校の提案。なかでも「こども銭湯」は楽しい提案だった。

「スマホから離れてスポーツに」は来年に迫った東京五輪を機会に子供世界が変えよと呼びかける提案となっている。夢のベスト 8 入りした「ラグビー日本チーム」。夢を抱けばその実現のための努力、研鑽を重ねる勇気を持てることを教えた。

子供たちに自然と触れ合う場を創り出す夢とアイデアも豊かだった。「町に清流を取り戻す」「学校林を広げよう」「水産業に親しみを」。「廃校を利用した朝市の開催」。廃校を廃屋にするのではなく、朝市で蘇らせるアイデアだった。

ひきこもりは子供、若者ニートだけでなく、中、高齢者にも多いことがクローズアップされ、社会問題化している。提案「親子で考えた迷い人との共生」は定年退職後に社会との接点を見いだせない「迷い人」たちの救出の道を探っている。蓄積した知識・才能発揮の機会がない、自信喪失、老老介護の苦悩など、高齢化社会の深奥でうずくまっている迷い人が「社会に貢献している自負」を取り戻す共生社会を真摯に模索する提案だった。

今回の夢アイデアには子供へ、老人へ、地域へのやさしさがあふれていた。

でっかい夢を育てよう

大きな夢としては、日韓関係の悪化の打開策として、友好平和大橋の建設。外国人と話したい、外国人と交流できる街づくり。オリンピックを控え、五輪の輪（世界）を繋ぐ、みんなの夢を具体的な提案にして見せていただいた。

「九州の大空に、朱鷺が舞う」。美しい朱鷺が蘇るには、都市化が進み過疎に苦しむ九州に、再度、朱鷺が舞う自然を九州に取り戻す提案は魅力的だ。朱鷺が舞う九州づくりは、自然環境を守る美しい島として、胸を張れる大きな夢だ。もっともっと、九州の夢を「朱鷺」のように、大きく羽ばたかせたい。

令和元年にふさわしく、美しく、（人と人の）ハーモニー、やさしく、何より元気の出る提案が多かったのが、うれしかった。（了）

玉川 孝道（西日本新聞元副社長）

夢アイデア審査委員長（平成 22 年～令和 2 年）